

Peter Mühlhäusler の言語観について(2)

Peter Mühlhäusler's Views on Language Part 2

岡 村 徹

公立小松大学

Abstract: In 1999, the author explored in detail about views on language by Peter Mühlhäusler. Originally, Mühlhäusler studied Pidgin English which is currently spoken in Papua New Guinea. However, after 2000 he turned his eyes to Norf'k spoken on Norfolk Island which is an English speaking Australian Territory, a small island of only 3,500 hectares, some 1,700 kms north-east from Sydney. Section 1 attempts to illustrate that the study of Mühlhäusler's views on language before 2000. Section 2 surveys his views on language with special emphasis on 2000s. Section 3 and 4 consider his views on language the year after 2010. Mühlhäusler concludes that the relationship between linguistic diversity and language endangerment is significant for the language maintenance of Norfolk society. Section 5 analyzes his views on language as a creolist.

Keywords: ecolinguistics, linguistic diversity, language endangerment, Norf'k

1. 序論

1999 年の拙著論文で、世界的なクレオリスト (creolist) である、Peter Mühlhäusler (以下、M と記す) の言語観について紹介した。

大きく三つの時期に分けて、まず 1970 年代は、パプアニューギニアで話されている tok・ピシン (Tok Pisin) の歴史的・社会的成立の背景や形態的・文法的な記述が中心であることが特徴であると報告した。1979 年に豪州国立大学から出版された、*Growth and structure of the lexicon of New Guinea Pidgin* は、その年代における代表作である。

次に 1980 年代は、tok・ピシンの統語的な現象にかかわる論文が増え、他の接触言語、例えば豪州のカナカ英語やニューギニアのピジン・ドイツ語との関連性も深く追究している。例えば、1986 年に、M. Clyne 編集の *Australia, meeting place of languages* の中で著した、Remnants of Kanaka English in Queensland は、1980 年代の代表的な論文である。

最後に 1990 年代は、ことばのエコロジーの問題に関心が移っていく。無論、それ以前から当該のテーマについて M は考察しているが、90 年代になると、その類の研究論文の数が増えていく。1996 年に、*Linguistic Ecology* という分厚い書籍を Routledge から刊行し、当該の研究テーマに

について、M が一区切りつけたと思ったが、2000 年以降もそれは続いていく。おそらく、当該の書籍で考えた理論を、他の言語で一般化できるのか考えたかったと思われる。その証拠に、2000 年代に入ると、研究対象言語がシドニーの北東 1,700km のところに浮かぶ、ノーフォーク諸島で話されている、ノーフォーク語（以下、N 語）にシフトしていく。

以下では、M の業績について、やはり大きく三つに分け、それぞれ 2000 年代、2010 年代、2020 年代として分析する。次に、M の言語観について浮き彫りにし、最後に彼のクレオリストとしての性格を考えてみたい。

2. 2000 年代

この時期は、上記の *Linguistic Ecology* の中で述べたことを、複数の言語社会で検証する意図もあったと思われるが、2003 年に先住民英語、2004 年に豪州先住民語の経済的成本と利益について、研究ノートを著している。それに加えて、2006 年に、やはり豪州先住民語 *Wirangu* 語についての論考を寄せている。M の勤務先は、アデレード大学であり、南オーストラリア州に位置していたため、当該の言語調査も行いやすかったと思われる。他にも、メラネシア系ピジンに関する論考も含まれている。

それでも、言語保持・言語維持研究という軸足は失われておらず、M は 2001 年に、オーストラリア Graz 大学英語教授の Alwin Fill との共同で *The ecolinguistics reader: language, ecology, and environment* を編集している。本書は、全体としては、4 部構成になっているが、M は、第 1 部の中で、生態言語学的な論考を寄せており、彼の言語観がよく表れているところと言えよう。本書の副題にも、*Language, Ecology and Environment* があり、言語はそれが話されている社会環境が健全でなければ、維持されないと考える。例えば、ソロモン諸島のエイウオ語 (Äiwo) における接頭辞 *si-* が、‘危険’、‘不快’、‘高価でない’、‘不潔’、‘軽蔑する’、といったマイナスの意味を指す名詞類別詞として機能しているが、Wurm (1981) を引用しながらそれについて言及し、英語の中にもこのような類別詞があると興味深いと述べている。つまり、当該言語の抽象性について、ユーモアを交えながら述べている (Mühlhäusler 2001: 35-36)。さらに、パプアニューギニアのエンガ語 (Enga) における動詞類の抽象性について言及している。これは主語の位置を占める名詞との関係性によって決まるという。こうした抽象性が、主従の関係が時に強く出る、欧米人との接触によって、失われる可能性があると述べる。

この時期は、2010 年代ほど、N 語の言語保持に関する研究に専念していないといった印象を受けるが、それでも、N 語の音声学・音韻論の研究 (2004)、N 語の形態的・統語的研究 (2005a)、N 語の多機能性 (multifunctionality) についての研究 (2008b) がある。

3. 2010 年代

2010 年には、ピトケアン語の成立におけるタヒチ語の貢献度について述べ、当該言語の歴史

的・文化的財産価値が高く、N 語はそれを受け継いでいるとする論考を寄せている。2011 年には、人間の持つ知識体系、すなわちノーフォーク島民が有する伝統的な文化的語彙に言及、2012 年には、N 語が有する人称代名詞の抽象性について取り上げているところから、こうした文化語彙や文法性を喪失することは、人類の知的財産を失うことであると考えているようである。

2010 年代の初頭に上記の研究を行っていることから、2016a 年にロンドンの Battlebridge から出版された、J. Nash との共著 *Norfolk Island: Home of descendants of the Bounty mutineers* の出版は自然な流れであったかもしれない。本書は、豪ニューイングランド大学で博士の学位を取得した、J. Nash との共著であるが、Nash が固有名詞学 (Onomastics) を専門にし、ノーフォーク島をフィールドの一つに選定していたことも、共著を出すきっかけになったであろう。

第 1 章は、ノーフォーク島への行き方、ツーリズムの歴史、宿泊、見所について触れ、第 2 章で、ノーフォーク島の歴史について概観している。そして第 3 章で、島民の暮らしを、第 4 章で島の環境について記述し、最後の第 5 章で、言語について詳述している。それぞれの章が個々に独立しているのではなく、第 1 章のツーリズムの歴史と第 5 章の言語が、また第 2 章の島の歴史が第 5 章の言語と、そして第 3 章の島民の暮らしが第 5 章の言語と、最後に第 4 章の環境と第 5 章の言語がそれぞれ有機的に結びつき、全体として、言語が人間存在および自然環境を抜きにして存在するのではなく、生態学的な視座から言語の保持が必要とのメッセージが本書から読み取れる。

まず、第 1 章と第 5 章の関係性について、例えば、島内に国立公園があるが、その入口には *Yorlyi kam luk orn* (*You all come and have a look*) の案内があり、N 語での案内を島内のあちこちに入れることで、観光客にとっては、ノーフォーク島に来たという実感が持てるが、そうした言語財産をさりげなく、表示しつづけることで、島民と観光客が相互に島の言語文化を再確認することができるとする。それは同時に、言葉を通してアイデンティティを確立する行為にもなると指摘する。

次に、第 2 章と第 5 章の関係性について、例えば、ノーフォーク島の歴史を語る際、第 1 期および第 2 期の英国からのノーフォーク島への囚人たちの移住・定住がポイントとして挙げられる。そこで繰り広げられた、囚人たちの営みが観光資源の一つとして、博物館を訪れることで知ることができる。また、1856 年に、バウンティ号の反逆者らの子孫がピトケアン島からノーフォーク島へ来島したが、彼らが無事に来島できたことを祝うために、毎年 6 月 8 日にバウンティ・デーを開催し、ピトケアン系ノーフォーク島民としてのアイデンティティを、当該の祝日を通じて確認する。これを観光の目玉とすることで、彼らの歴史的・文化的財産が保持される。

同じ年に、M は、やはり Nash との共著論文で、ノーフォーク島のツーリズムや言語景観や固有名詞の用例と言語保持との関連性について論文を発表している。

Mühlhäusler (2010) は、生態言語学が貢献できることの一つとして、「小規模な危機言語の話者が、生態学的に健全な文化的観光事業や言語的観光事業を企画することを支援することができ

る」(p.103)と述べているが、これをストレートに受け止めるなら、ノーフォーク島における観光事業が軌道に乗っているときは、N語も安定するということを意味する。島内で実施される各種ツアーの中で、N語に触れる機会が多々あるので、そうした機会が維持されればされるほど、N語も維持されることになる。

4. 2020 年代

この年代を代表する書籍に、2020年にMoutonから出た、*Pitkern-Norf'k: The Language of Pitcairn Island and Norfolk Island*がある。本書は、Mがこれまで発表してきた研究論文を一冊の書籍にしたものである。その証拠に、上記で述べた、N語の音声学・音韻論、形態論・統語論の研究は、本書にも収められている。ただ、第2章に描かれている、正書法と綴り字の諸問題(orthography and spelling issues)は、Mのオリジナルな部分であって、かなり心血を注いだ様子が窺われる。そのような中であって、一見すると、本書における議論と無関係であるように思えるが、実はそうではない。例えば、第2章の7.6と9.6では、N語の言語復興との絡みで、綴り字の議論を行っている。まず、前者において、危機に瀕した言語を記録すること自体、当該の言語復興に寄与すると述べる。そのためにも、後の世代がわかるような音声表記と録音をすることが重要だと考えている。これに加えて、統一的な綴り字や正書法に関して、当該のコミュニティの成員の多数の同意が得られる必要があるとする。また、後者においては、選択を誤ると、社会が分裂する基になると警鐘を鳴らしている。

同様に、第1章は固有名詞学(onomastics)に関する記述がなされているが、第1章の6.3では、N語の価値について議論をしている。これは島民がN語についてどのように考えているか、まさに言語とアイデンティティにかかわる重要な問題である。N語を使うことで、島民としてのアイデンティティを確立できなくなると、島民のN語を維持しようとする意識が希薄になる。Mは次世代にN語を残したいといった、島民の声を紹介しながら、言語復興の鍵となる島民の言語に対する態度について言及している。

第3章は、地理・人口動態・文化的要因(geography, demography, cultural factors)についてまとめられているが、第3章の2.1における孤立(isolation)は、言語の保持の問題を語るうえで軽視できない。これは拙著論文でも述べたが、孤立度が高いということは、それだけ当該言語の保持率の高さにも繋がる。なぜならば、人の移動が少なく、別の言語話者との接触が少なければ、当該の言語は直接的な影響を受けないからである。そうした事例は多く、N語も例外ではない。Mは、ピトケアン島が地理的に孤立していること、外部世界との接触機会が限られていたものの、捕鯨業者や貿易商人との接触が、ピトケアン語に影響を及ぼしたことを丁寧に説明している。例えばピトケアン島に来島した捕鯨船の船長の名前を、自身の家族に付けた例はその一例である。他にもタヒチやマンガレヴァやハワイ島民との接触についても言及している。

第3章の4.4の「人口動態学的要因とピトケアン・ノーフォーク語」(Demographic factors

and the P-N language) も関連する項目で、一般に N 語の話者に高齢者が多く、若者による N 語離れが進行していれば、N 語の消滅のリスクも高まる。M は、N 語の話者数は少ないが、いくつかの重要な語彙や構文の由来をたどることができる点と、当該のことは共同体が必要とする知識や表現を維持できる点について言及している。例としては、*Watawieh yu?* ‘お元気ですか’ の問いかけに対して答える際の *kushu* ‘元気です’ を挙げている。その由来については、複数の可能性に言及し、定説はないものの、N 語の個々の語彙や表現について、このように考察できる点を強調している。

また、第 3 章の 8 では、ピトケアン島民とノーフォーク島民との接触 (significant contact between Pitcairn and Norfolk Island) について議論しているが、これは言語の平準化の問題とかわかる。両島民の接触機会は、きわめて少なく、ただちに大きな影響を受けるというものではないが、両島における人口が少ないため、一旦接触すると、やはりその影響は軽視できないのである。M は、過去 150 年間における両者の接触機会は、限定的ではあったが、今日はインターネットやスカイプが普及し、これまでとは比べ物にならないくらい、接触機会が増えていると述べている。さらに、両島民は共通の出自や血筋といったところで、認識しているという。

第 4 章は一見すると、純粋な音声学的・音韻論的な考察のように見えるが、第 4 章の 5.4 に「英語方言のノーフォーク語に及ぼす影響」(English dialect influence) があり、島内に暮らす、豪州系ノーフォーク島民およびニュージーランド系ノーフォーク島民が話す英語の N 語に与える影響について議論している。現在の米国黒人英語も英語話者との接触が継続する中で、脱クレオール化の方向に動き、当初の英語変種の特徴から大きくその姿を変えた。同様のことがここノーフォーク島で起きうることを指摘するのは自然である。

第 5 章は、純粋に N 語の文法現象を記述しているように思える。中でも、N 語の代名詞に関する記述に頁を割いている。N 語の持つ文法的抽象性を強調し、当該言語が危機にさらされると、その抽象性が失われ、人類の知的財産が奪われてしまうことを危惧している。

第 6 章は、語彙 (lexicon) に特化した記述があり、直接的には 6.17 に「新造語と言語復興」(Neologism and revival) がある。しかしこの章で注目されるのは、名づけ (eponyms) であろう。バウンティ号の反逆者の子孫が受け継ぐ、固有名詞等は電話帳を見れば、それがすぐにそうだとわかる。道路の名前やホテルの名前にもそれがあつて、観光財産として、この島を特徴づけている。そうした歴史的・文化的遺産を保持してこそ、言語の保持にも繋がると考える。

第 7 章は、談話文法の特徴と語用論 (discourse features and pragmatics) について書かれている。一言で言えば、言語行動論とも言えようか。例えば、挨拶および招待の仕方や、会話参加者の場面や状況などが挙げられている。アングロ・ケルティック系文化とポリネシア系文化が混在する中、言語行動も一様ではなかろう。

第 8 章は、外部世界との接触に伴う言語的・社会的な変容 (external history and changes in progress) について触れている。外部世界との接触は不可避であり、歴史的にもそうであつた。

そのような状況の中、子どもの言語選択 (the children's language choices) をどうするか、教育 (language and education) はどうするか、ここノーフォーク島に限らず、どのことば共同体でも問題になる事柄である。二言語併用 (diglossia) の状況は、一種の歴史的・言語的財産であり、この状況を活用した、観光産業を発展させることで、言語の保持にも繋がる。

第9章は、研究史 (research history) である。Robert A. Hall Jr., John F. Reinecke や Hugo Schuchardt といった、伝統的なクレオリストの名前も散見されるが、9. 7. 5における、N 語の研究史がきわめて貴重である。中でも、N 語を最初に研究し、博士論文まで書き上げた Shirley Harrison の存在は大きい。M は、Harrison が家族と一緒に写った写真を紹介している。Harrison は、1984 年に豪州マッコーリー大学で博士号を取得している。Harrison も、N 語の全体像を著したが、そこからだいぶ時間が経過しているので、この M の著作は、その後の N 語を取り巻く環境を補足したという点で評価できる。

第10章をまとめとしているが、最後に、N 語の未来 (The Future of Pitkern and Norfolk) としていることからわかるように、やはり N 語の行方を心配している。

さらに、何も手を打たなければ、N 語は確実に衰退すると述べ、当該のコミュニティ全体で、N 語を保持していくことが望ましいとする。それを遂行するうえで、現在欠けているのは、島レベルでの取り組みである。例えば、N 語を教えること、記録保存すること、公共の看板での活用、などにかかわる人的資源が限られている。2004 年に公的な資格を獲得した N 語だが、それ以降、学校で使用される機会が増えているか、さらに言語使用域も拡大しているか調査する必要がある。必要なのは、こうした取り組みを実践するための人材を養成する訓練であると言い切っている (EXPERT REPORT, 2015-2016: 144)。

5. クレオリストとしての Mühlhäusler

これまで述べてきたように、M は当初、ニューギニアのトク・ピシンを研究していた。1974 年に豪州国立大学から出版されたモノグラフは、英国レディング大学に提出した M.Phil を基にしたものであった。これは 1971 年から 1972 年の間に、P. トラッドギルや I.P. ウオーバートン博士の指導の下、書きあげられたものであった。M が 1973 年と 1974 年にニューギニアで現地調査を行い、そこで得られたデータも加味した形で、本書を出版している。序論の最後に、自身の英文はドイツ語とアフリカーンス語の影響を受けているが、ご容赦願いたい旨の記述があるのは、彼らしくて興味深い。

1975 年に SIL (Summer Institute of Linguistics) によって出版された、パプアニューギニア言語学会誌の KIVUNG (McElhanon 編集) に寄稿した、Reduplication and Repetition in New Guinea Pidgin は、筆者の好きな論文の一つだが、こちらの原稿も妻の Jackie に英文を点検してもらっている。

博士論文の審査のため、この M に指導を受けたのが、豪ニューイングランド大学の J. Siegel で

ある。Siegel の博士論文は、フィジー共和国で話されている、接触言語の研究であったが、それ以降は、M と同じく、ニューギニアのトク・ピジンに関する研究業績が多くなる。あと豪州の接触言語にも興味を持ち、研究するところは、M と同じである。その後、Siegel はハワイのクレオール英語の研究に着手し、途中、ナウル共和国のピジン英語にも目を向けるが、ナウルに関してはこの業績 1 本のみである。しかし、Siegel が軸足としていた調査地は、M と同じく、その業績の多さから、やはりニューギニアであったと考えられる。二人とも、豪州の大学に長年勤務し、調査地も共通するところが多いが、考え方の異なる点もある。M は、オセアニア世界に暮らす人びとが、欧米人と接触することで、言語の保持に大きな影響を与えたと考えるが、Siegel はこの点について、欧州人との接触が、土地言語の存続を左右するとは限らないとし、M の考えに一部否定的である（私信）¹。両者とも、豪州国立大学で博士号を取得しているが、筆者にとっては、二人の研究が大きな道標となったことを付け加えておきたい。

実は筆者も、当初ニューギニアを調査地とした。そのため、M の研究論文をたくさん読む機会を得た。1975 年に M が執筆した、*Sociolects in New Guinea Pidgin*（ニューギニア・ピジンの社会方言）と *Reduplication and Repetition in New Guinea Pidgin*（ニューギニア・ピジンの重複法）は何度も何度も目を通した。筆者がニューギニアを初めて訪れた 1984 年のことであった。実際、後になって、この二つに関係する論文を筆者も著す機会を持った。その後、豪州のカナカ英語について調査をする必要性が出た際にも、やはり M の研究論文を数多く読む機会を持った。カナカ英語は、ニューギニアのピジンを拡大・発展させた、接触言語と言えるので、M が、ニューギニア・ピジンとカナカ英語の関連性に興味を抱いたのは至極当然のことであると考ええる。筆者も同様の過程を辿った。その後、M は、1996 年に *Linguistic Ecology* を著すが、この時はまだ N 語について十分な情報を持っているとは言い難く、どちらかと言うと、言語保持のための理論的考察がなされた書籍であると言った方が良いであろう。その理論を検証するために、N 語の事例が必要だったように見える。

実は、筆者は M よりも先にノーフォーク島を訪れ、N 語を研究していた。それから随分時間が経ってから、M も当該の島を訪れ、数々の論文を発表していたので、驚いたことがある。無論、筆者の業績など、M のそれと比べると、足元にも及ばないのだが、やはりクレオリストとして、ノーフォーク島に興味を持つのは時間の問題であったと考えられる。M と筆者を比べるつもりはないが、これら三つの調査地をどちらも観察したという点において、共通点があることになる。調査地という点で言えば、ナウル共和国のピジンに関する論文を、M は残していないが、筆者は複数回ナウル島に入島している。この点が大きく異なる。実は筆者が、ナウル島のピジンに興味を持ったのは、先に触れた J. Siegel の論文 *Pidgin English in Nauru* を読んでからである。そして、たまたま客員研究員として、Siegel のいる、豪ニューイングランド大学に一年間お世話になったのであった。世界で初めてナウルのピジンを紹介した、Siegel の功績は大きい。そして恥ずかしながら、筆者も日本国内では初めて当該のピジンを紹介することができた（第 2 回日本「ア

ジア英語」学会全国大会、1998 年、於神戸商科大学、現兵庫県立大学)。

筆者はこれまで、M の研究論文を数多く読む機会に恵まれた。M のアプローチは、記述的であり、共時的である。これは実に興味深いことだが、彼が Hall について、記述主義論者であると同時に、ピジン・クレオールに精通していると評している箇所があるが、実は M 自身がそうなのである (Mühlhäusler 2020: 349)。そういう点においては、Siegel も筆者も同じである。M がニューギニアのピジンを研究している間は、D. Laycock や T. Dutton からの引用が多いことに気づく。これは M がオーストラリア国立大学で博士号を取得したと関係があるかもしれない。Laycock も Dutton も当該の大学でニューギニアの諸言語を研究しており、M がオーストラリア国立大学 (ANU) に籍を置いた時点で、彼らから何らかの影響を受けるのは自然な流れであったと考えられる。Laycock は 1988 年にノーフォーク島民の Alice Buffett と共著で、*Speak Norfolk Today* を著す (この年に Laycock は他界) が、このことも M に影響を与えたのではないだろうか。筆者には、Laycock といえば、ニューギニア諸言語の研究をしているといったイメージがあったので、当該の書籍が刊行されたのを知った時は、唐突な印象を持った。どうやら Buffett から Laycock に共同研究を打診したようである (Mühlhäusler 2020: 372-375)。

N 語を研究している間は、Harrisson や Nash から引用が多い。前者は、世界で初めて N 語を研究した研究者であり、後者については、M が Nash の固有名詞学を通じて、言語の衰退にかかる諸問題を、自身の言語保持に関する理論と照らし合わせ、それを検証する狙いがあったのではないかと思われる。M はフライブルク生まれで、環境に優しく持続可能性といったキーワードを大切にす町で育ったことが、少数派の言語の保持に熱心になっている理由だという (Mühlhäusler 2022: 376)。

1960 年代の後半に、アフリカンス語の歴史言語学の教育を受けた際に、接触言語学やクレオール学に目覚めたようである。ただ、彼自身のアプローチに最も影響を及ぼしたのは、Rudie Botha の変形文法主義の評論だったようである。レディング大学時代には、文法理論と社会言語学を研究したが、David Crystal や Peter Matthews や Frank Palmer らから教育を受けた。Peter Trudgill からは、ラボプの社会言語学を学んでいる。豪州国立大学では、先にも述べたが、Stephen Wurm, Don Laycock, Tom Dutton, Bert Voorhoeve and Darrell Tryon らに博士論文の指導を受けている。

1979 年から 1992 年まで、彼はオックスフォード大学で講師として教鞭をとっているが、この時に ecolinguistics の考えを進展させている。1993 年にアデレード大学の教授に就任し、1995 年に N 語の研究を開始した。これまで 28 回もノーフォーク島に出向き、言語調査を行っている。ゆっくり時間をかけて、N 語を観察している。それはちょうど、ノーフォーク島の自然や歴史が長い時間をかけて成立したと関係があるかのようである。

6. まとめ

以上、M の言語観について、三つの時期に分けて観察した。彼の言語保持のための言語観は、一貫して、危機に瀕している言語を取り巻く生態言語学的な環境の保持こそが重要であって、単に多様性が維持されていれば良いというわけではないと主張していることがわかる。N 語の保持を考えるうえで大事なものは、当該のコミュニティ全体で、N 語を保持していくこと、それを遂行するうえで島レベルでの取り組みを実践する、例えば、N 語を教えることや記録保存することなどにかかわる人材を育成する必要があると言及した。

M は、2016 年に出版した著書の参考文献の中で、ピトケアン・ノーフォーク語の辞書を執筆中であることを明記している。タイトルは、*A Dictionary of the Pitkern-Norf'k language* で、続刊中であるとしている。言語学者にとって、危機に瀕した言語の文法書や辞書を著すことはきわめて大事であることは言うまでもない。2015 年以降に著したと思われる、Expert Report には、当該言語の辞書的な記述が見られるので、上記の図書が刊行されるのは時間の問題であると思われる。これは M に聞いてみないとわからないが、おそらく最後の大仕事になるであろう。楽しみに待ちたい。

注

- 1) 筆者は、2000 年 12 月に豪ニューイングランド大学で開催された、言語学セミナーにて、研究発表をおこなった。タイトルは、*Japanese Language Teaching in Nauru during the Japanese Occupation* であったが、発表終了後、会場にいた、Siegel 氏との歓談の中で、当該のコメントを頂戴した。

参考文献

- Amery, Rob and Peter Mühlhäusler. (2005) *Cost Benefit Analysis of Kaurua Language Reclamation*. Adelaide: Adelaide University, Linguistics Department.
- Baker, Philip & Mühlhäusler, Peter. (2014) The creole legacy of a bounteous mutineer: Edward Young's Caribbean contribution to the language of Pitcairn and Norfolk islands. *Acta Linguistica Hafniensia* 45 (2): 170-86.
- Hendery, R, Mühlhäusler, P & Nash, J. (2015) Sometime is lies: narrative and identity in two mixed-origin island languages. In Gounder, F (ed.), *Narrative and Identity Construction in the Pacific Islands*, Amsterdam: Benjamins, pp.101-16.
- Ingram, John & Mühlhäusler, Peter. (2004) Norfolk Island-Pitcairn English: phonetics and phonology.
- In Kortmann, Bernd & Schneider, Edgar W *A Handbook of Varieties of English: A Multimedia Reference Tool I*. Berlin: Mouton de Gruyter, pp.780-804.

- Ludwig, R, Mühlhäusler, P, and Pagel, S. (2019) *Linguistic Ecology and Language Contact*. Cambridge: CUP.
- Mühlhäusler, Peter. (1975) Reduplication and repetition in New Guinea Pidgin. In McElhanon, K.A. (ed.) *KIVUNG (Pacific linguistics, Series C, Books; no.52)*. Canberra: Australian National University, pp.198–214.
- Mühlhäusler, Peter. (1979) *Growth and Structure of the Lexicon of New Guinea Pidgin (Pacific linguistics, Series C, Books; no.52)*. Canberra: Australian National University.
- Mühlhäusler, Peter. (1986) Remnants of Kanaka English in Queensland. In M. Clyne (ed.), *Australia, Meeting Place of Languages. Pacific Linguistics*. Canberra: Australian National University, pp.241–255.
- Mühlhäusler, Peter. (1996) *Linguistic Ecology: Language Change and Linguistic Imperialism in the Pacific Region*. London and New York: Routledge.
- Mühlhäusler, Peter. (2000a) The development of the life form lexicon of Tok Pisin. In Ingrid Neumann-Holzschuh and Edgar W. Schneider (eds.), *Degrees of Restructuring in Creole Languages*. Amsterdam: John Benjamins, pp.337–59.
- Mühlhäusler, Peter. (2000b) Humboldt, Whorf and the roots of ecolinguistics. In Martin Pütz and Marjolijn H. Verspoor (eds.) *Explorations in Linguistic Relativity*. Amsterdam: Benjamins, pp.89–100.
- Mühlhäusler, Peter. (2000c) Language rights for the language of Norfolk Island. In Phillipson (ed.), *Rights to Language*. London: Routledge, pp.79–82.
- Mühlhäusler, Peter. (2000d) Language planning and language ecology: A current issue in language planning. *Current Issues in Language Planning* 1(3): 306–367.
- Mühlhäusler, Peter. (2001a) Typology and universals of Pidginization. In: Martin Haspelmath, König, Wulf Oestereicher, and Wolfgang Raible (eds.), *Language Typology and Linguistic Universals: An International Handbook*. Berlin: De Gruyter, pp.1648–55.
- Mühlhäusler, Peter. (2001b) Talking about environmental issues, in A. Fill and P. Mühlhäusler (eds.), *The ecolinguistics Reader: Language, Ecology, and Environment*. London: Continuum, pp.31–42.
- Mühlhäusler, Peter. (2002a) Pidgin English and the Melanesian Mission. *Journal of Pidgin and Creole Languages*, 17(2): 237–63.
- Mühlhäusler, Peter. (2002b) Language as an ecological phenomenon. *The Linacre Journal: A Review of Research in the Humanities* 5: 61–68.
- Mühlhäusler, Peter. (2002c) Why one cannot preserve languages (but can preserve language Ecologies). In Bradley, David, & Bradley, Maya (eds.), *Language Endangerment and*

- Language Maintenance*. London: Routledge Curzon, pp.34-39.
- Mühlhäusler, Peter. (2003) *Language of Environment - Environment of Language*. London: Battlebridge.
- Mühlhäusler, P, Dutton, T. E, and Romaine, S (2003) *Tok Pisin Texts: From the Beginning to the Present*. Amsterdam: John Benjamins.
- Mühlhäusler, Peter and Richard Damania. (2004) Economics costs and benefits of Australian indigenous languages. Discussion Paper, Canberra, Department of Communication, Information Technology and the Arts (DCITA).
- Mühlhäusler, Peter. (2005a) Norfolk Island-Pitcairn English (Pitkern Norfolk): morphology and syntax. In Kortmann, B, Schneider, E W, Burridge, K, Mesthrie, R & Upton, C (eds.), *A Handbook of Varieties of English*. New York: Mouton de Gruyter, pp.789-801.
- Mühlhäusler, Peter. (2005b) Review of Mufwene *The ecology of language evolution* (2001). *Language* 81: 265-268.
- Mühlhäusler, Peter. (2006a) The Norfolk language as a memory of Norfolk's cultural and natural environment. In Johnston, H (ed.), *Refereed Papers from the 2nd International Small Island Cultures Conference*. Sydney: Small Islands Cultures Research Initiative, pp.104-11.
- Mühlhäusler, Peter. (2006b) Naming languages, drawing language boundaries and maintaining languages, with special reference to the linguistic situation in Papua New Guinea. In Denis Cunningham, David E. Ingram, and Kenneth Sumbuk (eds.), *Language Diversity in the Pacific: Endangerment and Survival*. Clevedon: Multilingual Matters, pp.24-39.
- Mühlhäusler, Peter and Adrian J. Peace. (2006) Environmental discourses. *Annual Review of Anthropology* 35: 457-479.
- Mühlhäusler, Peter with Miller and Monaghan. (2006) *Introduction to Wirangu*. Adelaide: University of Adelaide.
- Mühlhäusler, Peter. (2008a) History of research into Australian pidgins and creoles. In W. McGregor (ed.), *Encountering Aboriginal Languages: Studies from Australia and the South Pacific* (pp.245-270). Canberra: Pacific Linguistics, pp.437-457.
- Mühlhäusler, Peter. (2008b) Multifunctionality in Pitkern-Norfolk and Tok Pisin. *Journal of Pidgin and Creole Languages* 39: 75-113.
- Mühlhäusler, Peter. (2010) The Tahitian language on Pitcairn Island and its contribution to Pitkern / Norfolk. *Islands of History: Proceedings of the 25th Anniversary Conference Professional Historian Associations (NSW)*, Norfolk Island July 2006. Anchor Books Australia.

- Mühlhäusler, Peter. (2011) Some notes on the ontology of Norf'k. *Language Sciences* 33: 673–79.
- Mühlhäusler, Peter. (2012) The complexity of the personal pronoun system of Norf'k. In Kortmann, Bernd & Szmrecsanyi, Benedikt (eds.), *Linguistic Complexity*. Berlin: Walter de Gruyter, pp.101–26.
- Mühlhäusler, P.2015–2016. Expert report on the distinctiveness of Norfolk Islander ethnicity, culture and the Norf'k language (Norfolk Island-South Pacific) [www.norfolkschoice.com/distinctivenessofnorfolkislander 2015–2016](http://www.norfolkschoice.com/distinctivenessofnorfolkislander-2015-2016), (Accessed on 13 May, 2019)
- Mühlhäusler, Peter & Joshua Nash. (2016a) *Norfolk Island: Home of Descendants of the Bounty Mutineers*. London: Battlebridge.
- Mühlhäusler, Peter & Joshua Nash. (2016b) Signs of/on power, power on/of signs: language-based tourism, linguistic landscapes and onomastics on Norfolk Island. In Puzey, G & Kostanski, L (eds.), *People, Places, Perceptions and Power*. Clevedon: Multilingual Matters, pp.62–80.
- Mühlhäusler, Peter. (2020) *Pitkern-Norf'k: The Language of Pitcairn Island and Norfolk Island*. Berlin: Walter de Gruyter GmbH & Co KG.
- Mühlhäusler, Peter. (2015–2016) Expert Report on the Distinctiveness of Norfolk Islander Ethnicity, Culture and the Norf'k Language (Norfolk Island, South Pacific) accessed on April 2024. (<https://docslib.org/doc/7011593/expert-report-on-the-distinctiveness-of-norfolk-islander-ethnicity-culture-and-the-norf-k-language-norfolk-island-south-pacific>)
- Nash, Joshua & Mühlhäusler, Peter. (2014) Linking language and the environment: The case of Norf'k and Norfolk Island. *Language Sciences* 41: 26–33.
- Robert Foster, Paul Monaghan and Peter Mühlhäusler. (2003) *Early forms of Aboriginal English in South Australia, 1840s–1929s* (*Pacific Linguistics* 538). Canberra: Australian National University.
- Wurm, Stephan A. (1981) *Notes on nominal classification Systems in Äiwo, Reef Islands, Solomon Islands*. Unpublished MS, 51, Canberra.
- ミュールホイスラー, P. (2010) 「言語的多様性をめぐる学問の可能性」原聖編『言語的多様性という視座』三元社, pp.89–108.
- 岡村 徹 (1999) 「Peter Mühlhäusler の言語観(1)」『帝塚山学院大学研究論集』34: 46–53.
- 岡村 徹 (2021) 「ナウル共和国のピジン英語の保持にかかわる諸問題」『オーストラリア・アジア研究紀要』6: 1–10.